

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

令和元年 10 月 27 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 京都大学医学研究科

職名・学年 講師

氏 名 趙 晃 済

助成の種類	令和元年度 ・ 国際研究集会発表助成	
研究集会名	第18回国際救急医学カンファレンス	
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()	
発表題目	Multidisciplinary Approaches for Strengthening Hospital Disaster Preparedness (多職種連携による災害拠点病院の強靱化取り組みについて)	
開催場所	韓国・ソウル・COEX Convention & Exhibition Center	
渡航期間	令和元年 6月 12日 ~ 令和元年 6月 15日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	100,000円
	使用した助成金額	100,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	発表作成資料費用： 約74,000円
		滞在費用： 約8,000円
旅費(一部)： 約20,000円		
(上記一部に本助成金を充当)		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) このたびはこのような助成金を賜りまして誠にありがとうございました。国際発表の機会に恵まれて今後の研究活動に多大なる示唆を得ることができました。本助成金は極めて有意義であり、貴財団のますますのご発展を祈念致します。	

成果の概要

医学研究科 講師 趙晃済

【学会の概要】

本学術集会 ICEM(International Conference on Emergency Medicine)=国際救急医学カンファレンスは、国際救急医学連盟 (International Federation for Emergency Medicine) による学術集会から発展したものであり、従来隔年で行われていたが、近年は毎年開催になっている。

2019年 ICEM は、6月10日から15日にかけて韓国ソウルのコエックスセンターで行われ、72ヶ国 2725の参加者があった。133セッションで1094のプレゼンテーションがあり、救急の全領域を網羅する大規模な学術集会であった。

【発表内容】

「Multidisciplinary Approaches for Strengthening Hospital Disaster Preparedness (多職種連携による災害拠点病院の強靱化取り組みについて)」というタイトルでポスター発表を行った。

発表内容は以下の通りである：

- ・日本は地震多発地域であり、医療機関における災害対策は重要である。京都大学医学部附属病院は2015年に災害拠点病院に指定され、病院の強靱化が必須となってきている。
- ・この文脈の中で、我々救急科は京都大学防災研究所、病院臨床工学部、地域連携医療部、情報学研究科とコラボレーションして多職種連携による防災対策の研究チームを立ちあげて、災害時の病院強靱化に向けた取り組みを開始している。
- ・1つ目は迅速建物健全性評価のシステム開発、2つ目は振動台実験による医療機器挙動評価である。
- ・1つ目については、京都大学医学部附属病院に合計9つの地震計を導入し、3つの病棟に配置した。得られたデータはサーバーに集積され、一定の震度をこえたものはリアルタイムでメール配信されるシステムを構築した。従来は発災時の建物健全性評価は専門家のアクセスの問題で迅速評価は期待できないため、非専門家による決断を余儀なくされていたが、判断根拠に乏しいものであった。本システムにより客観的なデータが得られることにより、正確な判定が期待できる。
- ・2つ目については、京都大学宇治キャンパスにある振動台を用いて、模擬透析室、模擬NICUを作成して振動実験を行った。その結果、キャストのロック条件や床材質と医療機器の挙動時について有意義な知見が得られたことを発表した。

・今後のプランとして、病院には配管や天井といった非構造部材が機能的に重要である特徴があるため、これらも対象に入れていく必要があるとして発表を締めくくった。

【参加の成果】

自らの発表や他の参加者の発表を通じて議論することによって、科学的な視点でこれまでの研究内容を整理できたのは国内学会では得難い体験であった。また、各国からの災害関連の発表を見ることで、本邦の防災体制を客観的に見ることができたのは大きな収穫であった。また空き時間を利用して防災研究以外のセッションにも積極的に参加し、各国研究者と情報交換を行い、今後の研究活動の展望に大きな示唆を得ることができた。